
疾駆青春

弥生 祐

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

疾駆青春

【コード】

N2041E

【作者名】

弥生 祐

【あらすじ】

俺は俺なりに青春時代を駆け抜けた

(前書き)

べたべた恋愛同好会、企画テーマ「出逢い」参加作品になります

疾駆青春

コイツは本当に女なのか？

対峙する小柄な同級生を前に、俺はしばし時を忘れ呆けていた。

十分前、二日酔いで頭が痛えから薬を買ってこいと姉貴に頼まれた俺。

ぼやぼやしていると怒りのハイキックが飛んでくるので、慌てて家を飛び出した時のことだ。

帰ったら普段の扱いに対する復讐をしてやる、なんて走りながら頭ん中で攻撃を組み立てた。なにせ弱ってるとはいえヤツは強い。背丈は俺と変わらんが胸はぶ厚いし、肩回りこそ華奢に見えるがスピードでは圧倒される。

親の顔も覚えてねえ俺にとって、唯一の肉親であり保護者、四つ上の姉貴。

そう、女といえば姉貴。それ以外よく知らん。

だからアパートの角を曲がった途端ぶつかり、弾き飛ばした女はヤワくて、姉貴と同性とは思えなかった。

『てめえ、どこ見て歩いてやがる。目玉ついてんのか、ああ！』

女は一瞬、恨めしそうに眉間にしわをよせた。だが次に浮かべたのは失せ物が見つかったかのような、まぶたを見開いた呆けの表情。

『あ、笛塔くん？』

続いて小さな唇からつむがれた声は、俺の知る女と違い、柔らかく甘い香りがした。

『あ、あの、プリント。ちょうど良かった。これから届けようと思っただから』

ここで俺の思考は急ブレーキを踏み込んだ。どうやらこの女は俺を知ってるらしい。だが俺は知らん。記憶にねえ。あんたいっただこの誰子よ？ 攻撃を仕掛けてこないところ、姉貴の知り合いじゃなさそうだが。

『ああん？ プリンがどうしたって。俺は確かに甘いもん好きだが…… いや待て、ちと待て、しばし待て。甘いものが好きとか宣言することに抵抗を覚える、硬派な俺の赤裸々な嗜好を知ってるのはキサマ…… やはり姉貴の仲間か！』

俺は両腕を上げ、すかさず戦闘態勢を整えた。

『甘い声で油断させるとは巧緻な奴。だが甘い、見切ったぜ』

俺は反対に隙をつこうと女の一挙一頭を覗き込んだ。と、女が着る濃紺のブレザーに見覚えがあることに気づいた。

『あ、あの、これ渡すように言われたの。笛塔くん、学校に来てなかったから』

『む。するとあんた、学校の、クラスの奴か』

合点がいった。俺は肩の力を抜き、改めて女を認めた。

『あの、手を貸して貰ってもいいかな？』
『お、おお、悪い。怪我無かったか』

さし伸ばした指先に女の細指が絡んだ。うっかりレスリングでいうところの力比べをしそうになって、手を取り直す。同級らしい女は苦笑いしつつ、腕に体重をあずけてきた。

思ったより軽い。つうか飯食ってんのか、などと図ったが、姉貴を知ってる俺は、強さの有無にさほど身の重さが重要じゃねえことを熟知している。んなことより俺が息を飲んだのは、ミルクケーキのような優しい匂いが、声だけじゃなく身体からも発せられてることだった。

しつこいようだが女といえば姉貴。姉貴といえば酒の匂い。つまり酒以外の臭気をまとうものは女じゃねえ。それが俺の女に対する法則。万物の真理。

だからこそコイツは本当に女なのか？ という疑念が生まれたんだが、フツ、俺も今年で十五。四捨五入すりゃ立派な大人の男子。女が姉貴みたいなのばかりじゃねえと知ってる。

しかし、柔らかい肌だ。吸いつくように俺の手を離さない……って、あれ？ 離してねえの俺か。

彼女は立ち上がっても手を離さない俺を怪訝に覗き込んだ。俺はぎこちなく指の力を緩め、ほどなく開放した。プリントを手渡され、二言、三言、会話を交わす。別れ際に彼女は「学校においてよ」と誘った。

俺はただ呆然と彼女を見送った。自分が何て返答したのか、まったく覚えてねえ。そのことに気がついたのは、薬を買い忘れて帰宅、姉貴のフライングニールキックを食らった後だった。

年から年中、喧嘩に明け暮れてた。四六時中、むしゃくしゃした気分支配され、世間を斜めに生きてきた。特に理由があつて学校をサボつてたわけじゃねえ。生活費の上、学費すら捻出しようとして日夜働く姉貴の負担を軽くしよう、なんてのは後づけの口実だ。

だから改めて登校するなんざ、なんだか恥かしくて、もとい、初志貫徹の精神に逆らう。そんなふうと考えてた俺にとって、あの女との出会いは良いきっかけだった。

学校に通い始めて一週間。あのヤワそうな同級生の名前が相募あいは弥生やよいだということ。とりたてて美人とかいうわけじゃねえが、場を大切に、盛り上げ役を買つてでる陽気さを持つということ。それ以外にはそこらへんに転がつてる女子と変わらない女だということを知った。

いや、もう一つあつた。不良のレッテルを貼られて久しい俺に普通に挨拶を、普通に笑顔を、普通に接してくれる、イカした女だった。

気がつきゃ俺の目は常に彼女を追い、鼻は匂いを求め、耳は一言たりとも逃さず、彼女に傾けるようになっていた。

そんなある日の昼休み。隣の男子をこづいてた俺に、彼女が話をかけてきた。

『もうすぐ修学旅行だね。笛塔くんはどこを回るの？』

問われて瞬間、「オマエの近くを回りてえ」なんて答えそうになった。

いかん、んなこと言ったら近くで談笑してる奴らに、俺が彼女の回りでヒラヒラと踊りてえ不思議ちゃんだと思われちゃう。

『そ、そうだな。そいつはなかなか難しい問題だ。今度、考えて』
『ねえねえ、相募は誰と回るの？』

こともあろうに俺と彼女の会話に別の女が入ってきやがった。

『誰って、三日目のこと？ まだ決めてないな』

どうして女つてのはこうも遠慮なく人の間合いに入りこみやがる。俺は閉口しつつ、しかし耳だけは前を飛ばす彼女たちの言葉を拾った。

どうやら話の中心は自由行動の三日目に、誰と回るかってことにシフトしている。彼女はまだ特定の誰かを決めてないらしい。俺にもチャンスが残っていると心中でガッツポーズをした頃、午後のチャイムが鳴った。

帰宅途中にも思わずスキップしてる自分がある。鼻歌まじりに心の師匠、アントニオ氏の闘魂テーマを口ずさむ。

三日目に一緒に行動するという約束はまだだ。しかし不安はねえ。例え断られても、みぞおちに一発食らわして強制連行すりゃいい。だからノープロブレム。きっと彼女なら許してくれるだろう。

帰宅した時、正確にいうと俺と姉貴が住む二階建ての木造アパートを視界に捉えた時、俺は目を疑った。十数人も人間が一人の女、俺の姉貴を取り囲んでいたからだ。

『てめえらぁぁ！！』

叫びながら猛ダツシユ。飛び掛りざまに一人の男に蹴りをいれ、躍りかかる。幸い姉貴はさすがに強い。三人ばかりを地べたに這いつくばらせている。しかし多勢を前にしダメージも受けていた。

俺は浮かれてた自分を恥じた。学校に行くようになって、それまで自分が犯した愚考の数々を忘れてたのだ。姉貴と俺との最強タッグの前に次々と崩れおちていく連中。その顔はどれも見知ったものばかり。かつて鬱屈とした心を解消させる手段。俺の暴力の前に犠牲になった奴ばかりだった。

『すまねえ、姉貴。コイツらは……』

『言い訳は聞きたくないね。ただアンタが真面目に学校に行きたいなら、すべきことは一つしかないよ』

『ああ、分かっただらあ』

俺は倒れてる連中の一人、まだ余力が残ってそうな男の襟首を掴んだ。

『テメエら扇動した奴あ、どこのどいつだ』

俺がケジメをつける方法。それは過去に残した負の遺産を片付けること。それを済まさなければ、俺は彼女と一緒に行動すべき資格がねえってことだ。

翌日、敵の親玉がいる学校へと乗り込んだ俺は、無抵抗で殴られ、その代わりにこれまでの過失を水に流すよう頼み込んだ。

『嫌なこつた』

その親玉の言葉に俺はブチ切れた。

『てんめえ、クソガキやああ!!』

ケジメをつけられなかった俺は結局、ここらの不良連中をひざまづかせることでしか、解決方法を取れなかった。当然、学校側はそんな俺を修学旅行に参加させず、自然と俺は彼女がいる校舎から距離を置くようになった。

もう学校へは行けねえ。

そう思いながらも気づけば彼女が使う通学路のそばで、たむろする自分がいる。

一日、一度でいい。顔が見たかった。出来れば声も聞きてえが贅沢はいわねえ。あの陽気な笑顔が見れば、それで充分だった。

だが通学途中、長めの髪を揺らして歩く彼女は、暗く沈んだ表情を見せるようになっていた。

女友達が近づくと屈託のねえ笑顔は復活する。でも上っ面だけだ。一人で歩いてる時には涙さえ見せやがった。

ちきしょう。誰だ、愛慕を泣かす奴は。

そう思いつつも、初めて目にする彼女の泣き顔に、
「可愛いじゃねえか、この野郎……じゃなかった、このスケめ」
なんて、彼女に対する恋心を自覚しちまう。

それから俺は原因を探るため、少しでも学校に行くようになった。彼女は教室でも、時おり表情に陰を差してた。物思いにふけることが多くなり、ため息を漏らす。そのたびに俺の心は疼きの度合いを増し、でっかい穴を広げちまう。

どうすりゃいい

どうすることも出来ねえ自分が悔しかった。なにより登校を再開したことで、彼女の強がりやを間近で見ることが切なかった。

俺に出来ることは何かねえのか。

授業の内容なんざ役にたたねえ。彼女に告白する資格もなく、かといって見守るに辛い日々が一日、二日、一週間と瞬く間に過ぎていく。

まさか あの野郎のせいか？

彼女にモーションをかけてるらしい、違うクラスの男子。認めたくねえが彼女の方もまんざらではないように見えた。一度ならず登下校の最中に並んで歩く姿を見てしまってもいる。だからといって俺に何が出来るだろう。

とりあえず屋上にでも呼び出して、奴をシメるか。そんなことを考えて迎えた翌日。

『んだとお!!』

彼女の元気がなかった真の原因を知って俺は驚きの声を上げた。

通学途上でも朝のホームルームにも彼女の姿が見当たらなかった。それでなく隣の女に聞いたら、今日付けで転校したのだと言う。修学旅行のあと、しばらく学校に来ていなかった俺だけが知らなかったのだ。

その日の夜、俺は生まれて初めて後悔という言葉で濡れた布団の上で知った。

出席日数が足りないかも？ という心配をよそに俺にも無事、卒業というやつがやって来た。

硬派を気取る俺は泣くのは耐えたが、式が終わって校舎を顧みた瞬間には、やはり淋しく感じられた。

校庭の傍、桜の舞い落ちる一角では同級生の奴らが男女と問わず抱き合っつていやがる。

二度とは戻らない時間か……

俺の振り返るべき記憶は一つしかねえ。が、いつまでもこの場にとどまっていると涙を誘われそう、振り返ることもせずに俺はその場を離れた。

胸の中をめぐる痛みが彼女を思い出させる。きっと俺はいつまでも忘れないだろう。

いつのまにか駆け出していた。それでも痛みは消えることなく、くり返し責めやがった。

息をはずませて、ひたすら走る影が重なる。そんな俺の人生はこれからもまだ、続く。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2041e/>

疾駆青春

2008年11月7日07時16分発行